

「持続的な畜産物生産の在り方検討会」の 中間とりまとめ等に関する研修会の概要

生活者からの安全・安心への要求が強まるなか、近年では、「持続可能な社会の実現に向けた取組」が求められる社会環境になってきている。また、農林水産省は、5月に「みどりの食料システム戦略」を策定、6月に「持続的な畜産物生産の在り方検討会の中間とりまとめ」を公表するなど、畜産（酪農）分野においても持続可能性に関する規制・基準の見直しなどが政府主導で進められている。

こうした状況を受け、本会議では7月7日、農林水産省畜産局総務課調整班 松井裕佑課長補佐を講師に招き、指定団体等の職員を対象にした研修会をWEB形式により開催した。ここでは、本誌2021年7月号に掲載した「みどりの食料システム戦略」を踏まえ、「持続的な畜産物生産の在り方検討会中間とりまとめ」の内容を中心に、研修会の概要を紹介する。

1. 「持続的な畜産物生産の在り方検討会中間とりまとめ」とは

2021年7月号の本誌で、「みどりの食料システム戦略」は、「生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現するもので、2040年までに革新的な技術・生産体系を順次開発し、2050年までにその社会実装を実現する目標を掲げた長期の計画である」と紹介した。

今回の研修会で取り上げた「持続的な畜産物生産の在り方検討会中間とりまとめ」は、この「みどりの食料システム戦略」を踏まえ、既存の現場の取組も含めて畜産分野において今後行うべき取組を再整理したものとなっている。

2. 持続的な畜産物生産の在り方検討会の開催経過

本検討会は、旧生産局畜産部長の諮問機関として立ち上げられ、全3回開催された。

- (1) 令和3年1月18日：第1回検討会（畜産をめぐる情勢、検討会の論点について）
- (2) 令和3年3月31日：第2回検討会（骨子案について）
- (3) 令和3年4月27日：第3回検討会（中間とりまとめ案について）
- (4) 令和3年6月24日：中間とりまとめ公表

3. 持続的な畜産物生産を図っていくための課題等

我が国の畜産（酪農）は、狭く山がちな国土条件の下、アジアモンsoon地域での気候に応じた生産を行い、人が食用利用できない資源を食料に

変え、飼料・家畜・堆肥の循環サイクルを形成しながら、農村地域の維持・発展や我が国のバランスの取れた食生活にも貢献してきた産業である。

しかし近年では、農林水産分野における環境負荷軽減の取組が加速しており、「みどりの食料システム戦略」が策定されたが、我が国の温室効果ガス排出量の1%を占める畜産（酪農）でも、その削減の取組が求められている。また、輸入飼料に過度に依存した生産システムからの脱却や、発生量に地域差がある家畜排せつ物の循環システムの適正化を図る必要がある。

こうした状況を踏まえ、畜産業を今後とも持続的に営んでいくための生産・流通・消費の取組を示し、生産者や消費者の理解を得る必要がある。

【主な課題】

- (1) 畜産に起因する環境負荷
地球温暖化、水質汚濁、悪臭等
- (2) 高齢化等に起因した畜産経営の労働力不足
高齢化、規模拡大等
- (3) 輸入飼料への過度な依存
価格変動、需給変動、窒素・リンの過多、気候変動や世界的な人口増加による供給不安等

4. 戦略に基づく今後行うべき具体的な取組

具体的な取組には、現場での取組における既存の技術や今後取り組むべき事項を纏めた「生産段階」のものと、「みどりの食料システム戦略」に基づいた取組である「研究段階」のものがある。これらを両面で取組み、実用化していくことが重

要である。

(1) 家畜の生産に係る環境負荷軽減等の展開

① 家畜改良

【生産】家畜改良増殖目標に掲げた飼料利用性の向上等に向けて効率的な家畜改良を引き続き推進

【研究】高い耐病性を有する家畜への改良

② 飼料給与

【生産】家畜の特性に留意しながら脂肪酸カルシウムやアミノ酸バランス飼料等の温室効果ガス削減飼料の利用推進

【研究】新たな温室効果ガス削減飼料の探索

③ 飼養管理

【生産】ICT機器や放牧（耕作放棄地含む）の更なる普及

【研究】AIによる事故率の低減等の高度な飼養管理技術の開発

④ 家畜衛生・防疫

【生産】埋却地の確保等、更なる飼養衛生管理基準の遵守徹底

【研究】疾病の早期発見に資する新たな診断法等の開発

(2) 耕種農家のニーズにあった良質堆肥の生産や堆肥の広域流通・資源循環の拡大

【生産】水分調整等の適切な実施、耕種農家のニーズを踏まえた高品質堆肥の生産、ペレット化等の更なる推進、堆肥の輸出の検討

【研究】ICT等を活用した家畜排せつ物処理の省力化、牛糞堆肥のペレット化技術の開発や堆肥の広域循環システムの構築

(3) 国産飼料の生産・利用及び飼料の適切な調達の推進

【生産】水田の汎用化の推進による飼料作物等生産の加速化、子実用とうもろこし等の国産濃厚飼料生産の拡大

【研究】耐暑性、耐湿性等に優れた品種開発等、低コスト化や多収性向上に向けた子実用とうもろこしの品種開発、耐久性に優れた生分解性サイレージラップフィルムの開発

(4) 有機畜産の取組

【生産】有機農畜産物や消費者理解醸成のための取組の推進

【研究】有機飼料生産に適した飼料作物の品種、栽培方法の開発

(5) その他畜産物生産の持続性に関する取組

【生産】農場HACCP、薬剤耐性対策、労働安全・人権の尊重、アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理の普及、畜産GAP認証等の更なる推進

【研究】抗菌剤に頼らない畜産生産技術の推進、アニマルウェルフェアに配慮した飼育管理技術の開発

(6) 生産者の努力・消費者の理解醸成

【生産者の努力】SDGsの達成に向け、(1)から(5)に掲げた取組を実践するとともに、取組の見える化を推進

【消費者の理解醸成】畜産業の意義や環境負荷軽減の取組は生産性にも配慮しながら徐々に進むものであること、コスト増の取組は価格にも反映されることについての理解醸成

5. 我が国で畜産（酪農）に取組む意義

我が国の畜産業は、家畜改良による生産性向上と規模拡大による生産量拡大により、経営離脱農家の生産減少分を補いながら安定的に発展し、人が食用利用できない資源を飼料作物として利用してきた。

畜産業は、飼料、家畜、堆肥という循環型のサイクルにより成立しており、食品残さ等を利用したエコフィードや地域の未利用資源の活用においても循環型のサイクルにより成立していることから、持続可能な農業の実現に貢献している。

さらに、耕種農家が困難な山間地・寒冷地等、条件不利な地域での草地利用や林間放牧による土地利用、荒廃農地の有効活用、景観の維持、畜産物の流通に当たって加工が必要なことから、関連産業の視野が広く、知育の雇用に繋がる産業出るといった観点から、農村地域の維持・活性化にも貢献している。

また、畜産物の安全確保の観点から、HACCPの考え方をとり入れた衛生管理手法の生産段階への導入に取り組むなど、安全な畜産物を国民に供給してきた。そして、都市近郊も含めた生産現場は女性や障害者の活躍の場であることや、動物の飼養管理は子供たちの教育の場としても貢献している。

これらのことから、畜産業は我が国における必須の産業であると言える。